I-15

アルヴァ・アアルトの自然観に関する研究
-日本文化への接近と「夏の家」での原点回帰について-

Study on outlook on nature of Alvar Aalto

Over approach to Japanese culture and the origin recurrence in "the summer house"

○小田切覚史 [1]，田所辰之助 [2]

*Satoshi Otagiri[1], Sinnosuke Tadokoro[2]

Alvar Aalto is a Finnish architect representing the 20th century and features Finnish Nature and a building living together. I was interested in the building which respected nature of such Alvar Aalto, natural outlook on and thought that I wanted to study it. He is a Finnish architect, but He interests in Japan.Therefore when Alvar Aalto forms outlook on nature, I come under what kind of influence of Japanese culture and clarify what you referred to. In addition, as a study of the outlook on nature, I analyze it around "the summer house"

1.研究目的及び方法

アルヴァ・アアルトは 20 世紀を代表するフィンランドの建築家であり、フィンランドの大自然と共生するような建築が特徴である。私はそんなアアルトの自然を尊重する建築、自然観に興味を持ち、研究したいと考えた。アアルトはフィンランドの建築家であるが、日本への関心を持っていたとされている。そのため、アアルトが自然観を形成するうえで日本の文化からどのような影響を受け、何を参考にしたかを明らかにする。また、アアルトの自然観が顕著に表れた作品として、「夏の家（コエ・タロ）」を分析する。

2. アルヴァ・アアルトの自然観

アアルトの自然観を形成するうえでその基礎となっているものはやはりフィンランドの文化だと考える。フィンランドの人々の特色を調べてみるとフィンランド人は往々にして自然に親しみ田舎風で現実的な気風を保ち生活しているという事が一般的な解釈だった。アアルト自身も彼の生まれや生い立ちを見るとこれらと大きく外れていないと考えられる。中でも、アアルトの父は専門測量技師であり、一般的なフィンランド人に比べ幼少の頃より自然に関わることが多かったことより、より一層自然と親しい関係であったと推測される。つまり彼にとって自然とは常にそばにあるとても近しい存在なのだ。こうした生い立ちのなかでアアルトの自然観は形成され、自然を積極的に建築と結び付けようとする考え方が育まれたことがわかる。

3.アルヴァ・アアルトと日本

アアルトは 1930 年代に日本に大きく関心を持ったとされている。理由としては機能主義の美学的理想からの脱出を模索していた際に日本の文化を参考にしていたということだ。自然と向き合う日本の文化はアアルトにとって無視できない内容のものであった。アアルトが参考にした事物はフィンランド日本大使館の友人にもらった日本の詩集、吉田鉄郎の『日本の住宅』、ストックホルムの民族誌学博物館の庭園に建てられた日本茶室「瑞暉亭」の三つが挙げられている。アアルトの学んだ日本はその作品にも表れている。具体例としてマイレア邸のフラワールームの棚やドアは大きく日本らしさを感じる。木そのものを細やかなディティールで利用し、繊細に扱う様からは和の雰囲気さえ感じる。自然の材（木材）などを上記のように利用しているのはアアルトの作品の中で初めての試みであり、日本の文化がアアルトの建築、自然観の形成の一要因となったのがわかる。

図 1　マイレア邸のドア・フラワールームの棚

4.夏の家の設計手法とアアルトの自然観

アルヴァ・アアルトの建築で 1953 年に建てられた「夏の家（コエ・タロ）」は私が考える中でアアルトの自然観を最も大きく映し出した建築だと考える。

1：日大理工・学部・建築　2：日大理工・教員・建築

夏の家は再婚したアアルトが静かに暮らせる家を考え設計されたものであるが、コエ・タロの意味の通りこの建築は実験住宅でありこの時代のアアルトの行いたかったことが凝縮された建築となっている。この建築の発想の根底には「土地に根付き自然に回帰する建築を作る技術的なバックグラウンドを作ること」にあった。この時代の建築家の多くは最先端の素材や技術といった実験をそろってやりたがっていたのに対し、アアルトは寧ろ時代を遡った実験を行った。実験の内容は大きく分けて 3 つある。一つ目は基礎のない木造建築を建てることである。在来のログハウスには基礎という基礎はない。アアルトは基礎をなくすことでログハウスの原理を復活させる事、長押、貫のない垂直線だけのディティールによる林のような壁面を作り出そうとしたのである。これこそが夏の家のコンセプトの核であり「土地に根付き自然に回帰する建築を作る技術的なバックグラウンドを作ること」を体現している部分である。二つ目は煉瓦である。フィンランドでは元々煉瓦はあまり利用されない建材である。アアルトはあえて煉瓦を使うことで、有機的な曲線や、林が連立しているようなディティールを作りだした。この有機的曲線も、フィンランドの自然の景観に想を得てできた形態と空間である。また、煉瓦は集積させ、積み上げて利用する建材であるため潜在的に自然に近いディティールを持つ建材だと考えられる。自然とは森が、木が、葉が集積され初めてできるものだ。煉瓦とはそういった自然をデザインするには最適な建材である。そしてアアルトの曲線や独自の配置計画によって、自然に近似したデザインとなる。アアルトはこういった考えもあり、あえて煉瓦を利用したのではないかと考える。三つ目は自然と融合し建築がグラデーションをなしながら分散していく配置である。これは配置図を見ればわかるが、流れるように建築を構成する空間が小さくなっていき、最後には湖へのアプローチのウッドデッキだけとなる。このデザインは建築が少しずつ自然と融合していく空間を作り出しており、違和感ない自然と建築の関係性を構成している。この三つ目の点はあまり技術的な観点ではないが空間体験を考えると、アアルトの自然観を強く表していると考える。建築空間が少しずつ消失し森と融合していき最終的に湖畔へと導かれて森が開ける様は自然を、建築を双方ともに引き立てるデザインと言うことができる。

5.結論

アルヴァ・アアルトの自然観はフィンランドの文化がその基礎となっている。アアルトが様々なことを学ぶ上で日本文化を参考にしており、アアルトの自然観を形成する一つの要因となっていた。そのアアルトが培った自然観が大きく表れている建築として「夏の家（コエ・タロ）」が挙げられる。夏の家においてアアルトは最先端の素材や技術ではなく自然とどう向き合い、回帰するかという実験を行った。建築にグラデーションを与え、自然の中に消え去っていくように配置し融合させるという手法の中に、アアルトの自然観が端的に表されているのである。

図 2　「夏の家（コエ・タロ）」正面写真

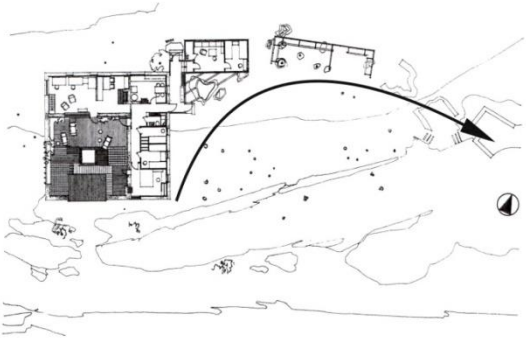

図 3「夏の家（コエ・タロ）」配置図とグラデーションの関係

6.参考文献

・三上祐三　「夏の家で会ったアールト」『建築文化』53 巻 663 号　1998 年9月　P112

・後藤武　「住居の地勢学：マイレア邸論」『建築文化』53 巻 663 号 1998 年9月　P121

・ユハニ・パラスマー編　鈴木圭介訳　「フィンランド建築に見る日本　-アルヴァー・アールトとフィンランドの合理主義への日本の影響」『建築文化』53 巻 663 号 1998 年9月　P147

・平山達『建築ガイドブック　アルヴァ・アアルト』小山武彦　　丸善株式会社　H21 年

・ヨーラン・シルツ編　　田中雅美　田中智子訳『白い机』鹿児出版会　1992 年

・伊藤大介『アアルトとフィンランド － 北の風土と近代建築 － 』丸善　1990 年

7. 図版出典

・図 1　ユハニ・パラスマー編　鈴木圭介訳　「フィンランド建築に見る日本　-アルヴァー・アールトとフィンランドの合理主義への日本の影響」『建築文化』53 巻 663 号 1998 年9月　P149

・図 2　Alvar Aalto Museo（http://www.alvaraalto.fi/experimentalhouse.htm）

・図 3 三上祐三　「夏の家で会ったアールト」『建築文化』53 巻 663 号　1998 年9月　P117